

芭蕉

特別
14
3157
14(2上)

5 6 7 8 9 140 1 2 3 4 5 6 7 8 9 150 1 2 3 4 5 6 7 8 9 160



14
3157
14
(2上)

初稿の書、此の抄取の事
 七々々私語、此の抄取の事
 たる、此の抄取の事
 文、此の抄取の事
 何、此の抄取の事
 合、此の抄取の事
 字、此の抄取の事
 上、此の抄取の事
 下、此の抄取の事



酒私集は白

杉凡

みこのとも

殊之部

初秋やきこぬらば秋の夜を

七々や秋夜をいふかたの夜

たあつたのこゝろに 徳合羽

文月やふらふら夜よのこゝろ

何れも依波の様おとりの川

合歡の木は葉はしるしの葉は新

なるかよひも旅の夜やあつの上

と浮き北枝のつらみのあつたあ

しるしの葉はしるしの葉はしるしの

Handwritten text at the top of the right page.

Main body of handwritten text on the right page, consisting of several lines of cursive script.

Main body of handwritten text on the left page, consisting of several lines of cursive script.

Handwritten text at the bottom of the left page.

あはれ〜

二見の浦

あはれ〜

開越る日

隠れ

あはれ〜

あはれ〜

あはれ〜

開關

あはれ〜

あはれ〜

あはれ〜

あはれ〜

あはれ〜

あはれ〜

あはれ〜

あはれ〜

あはれ〜

あはれ〜

あはれ〜

あはれ〜

お菊の小松よ

思れよお人お梅もも菊の秋
小松お梅お菊お梅お菊お菊

お菊お菊お菊お菊お菊お菊

秋七月七日お菊お菊お菊お菊

七種お菊お菊お菊お菊お菊

お菊お菊お菊お菊お菊お菊

お菊お菊お菊お菊お菊お菊

七種の秋お菊お菊お菊お菊

彼のお菊お菊お菊お菊お菊

一家お菊お菊お菊お菊お菊

小松お菊お菊お菊

お菊お菊お菊お菊お菊お菊

お菊お菊お菊お菊お菊お菊

お菊お菊お菊お菊お菊お菊

お菊お菊お菊お菊お菊お菊

お菊お菊お菊お菊お菊お菊

守榮院

お菊お菊お菊お菊お菊お菊

お菊お菊お菊お菊お菊お菊

お菊お菊お菊お菊お菊お菊

お菊お菊お菊お菊お菊お菊

お菊お菊お菊お菊お菊お菊

お菊

あつてはつとあつてはつと
書かざるは

後日記美人圖
題り

蘭花香も様のほかに
草のりあつてはつと
鶏卵も雅なまのり
等もあつてはつと

画讚

枝あつてはつと
越後のあつと
美園あつと

後醍醐帝は神徳をおと

所願もつとあつと
承打もつとあつと
あつとあつと

書名菴

草花を志す也
石のく木槿もつと
花木槿もつと

道昌寺中は柳

庭掃つ出もや

名月三三のあまの月

堅田よ

名月三三のあまの月

名月三三のあまの月

名月三三のあまの月

名月三三のあまの月

名月三三のあまの月

堅田よ

名月三三のあまの月

名月三三のあまの月

名月三三のあまの月

名月三三のあまの月

名月三三のあまの月

名月三三のあまの月

名月三三のあまの月

名月三三のあまの月

名月三三のあまの月

名月三三のあまの月

名月三三のあまの月

名月三三のあまの月

名月三三のあまの月

名月三三のあまの月

名月三三のあまの月

名月三三のあまの月

名月三三のあまの月

名月三三のあまの月

名月三三のあまの月

名月三三のあまの月

名月三三のあまの月

名月三三のあまの月

名月三三のあまの月

名月三三のあまの月

名月三三のあまの月

名月三三のあまの月

名月三三のあまの月

名月三三のあまの月

山蘭初七日 荷事のやまをいふ

山蘭初七日 荷事のやまをいふ

十廿夜子海を昔もかひのやまを
いふのやまを今期に海をいふ
あゝいふのやまをいふのやまを
木もいふ海をいふのやまをいふの月

山蘭初七日 荷事のやまをいふ

休まゝいふのやまをいふのやまを
三日のやまをいふのやまをいふのやまを
三日のやまをいふのやまをいふのやまを

伯の東のやまをいふ
たゝいふのやまをいふのやまを
いふのやまをいふのやまをいふのやまを

荷事のやまをいふ

山蘭初七日 荷事のやまをいふ

いふのやまをいふのやまをいふのやまを

いふのやまをいふのやまをいふのやまを

いふのやまをいふのやまをいふのやまを

いふのやまをいふのやまをいふのやまを

いふのやまをいふのやまをいふのやまを

川とよはりやまをいふのやまを

いふのやまをいふのやまをいふのやまを

いふのやまをいふのやまをいふのやまを

つら一糸あはまのつら

ふたつ

あはれしお母は秋の月を
ふりしるの風やふの月
休や娘のまは月あ
宿のまは月あ

留尾

月あはれしるの月あはれしる

まはれの月あはれしる

つら一糸あはまのつら

あはれしるの月あはれしる

悼遠旅の天音法印

あはれしるの月あはれしる
あはれしるの月あはれしる
あはれしるの月あはれしる
あはれしるの月あはれしる

燧山

あはれしるの月あはれしる

あはれしるの月あはれしる

あはれしるの月あはれしる

白雲
白雲下

東野道はうは時
はまうはら
はら
泊新集、き日のあ
らひり

入月の何なる批の面隅の如
く代や藤もさだたる雪の霜
月のころぬよお摺もあつら
戸持あつけとあつら
伊豆山つらつたつらつた
まらつは只是孤山の懐あり
甘きふ月をぬかま一伊吹の
見も程やまはつたつた
九さつ起つた月おさつた
宿つて月洞堂はつたつた

行なつた
泊新集、き日のあ
らひり

のにお中よ海をこつたつた
橋おさつたのつた月おさつた

喜ぶとま

月影もつたつたつた
廿二日つたつた月おさつた
おさつたつたつたつた
おさつたつたつたつた
おさつたつたつたつた
おさつたつたつたつた

馬のつたつたつたつた

茶の湯

作らば我も茶も好む事

茶の湯の味は遠く陸奥の茶と

をばらば谷坊の茶より山女茶

をばらば九里の茶より茶は

茶の湯

茶の湯よりなる茶は白

州の茶よりなる茶は

おろし茶の味は茶は

茶の湯よりなる茶の味は

稲の湯の味は茶の湯

茶の湯

茶の湯の味は茶の湯

茶の湯

茶の湯の味は茶の湯

茶の湯

茶の湯の味は茶の湯

茶の湯の味は茶の湯

茶の湯の味は茶の湯

茶の湯の味は茶の湯

三葉の皮又根のからむもの
三葉のつぎをてら屋の切しるは根は屋
三葉のつぎをてら屋の切しるは根は屋
三葉のつぎをてら屋の切しるは根は屋
三葉のつぎをてら屋の切しるは根は屋
三葉のつぎをてら屋の切しるは根は屋

山中温泉の湯

山中温泉の湯
山中温泉の湯
山中温泉の湯
山中温泉の湯
山中温泉の湯
山中温泉の湯

猿由りよまき
日投ぬ秋のあ
しあま考へ

猿や命哉のしるは根は屋
猿や命哉のしるは根は屋
猿や命哉のしるは根は屋
猿や命哉のしるは根は屋
猿や命哉のしるは根は屋
猿や命哉のしるは根は屋

如水別荘

如水別荘
如水別荘
如水別荘
如水別荘
如水別荘
如水別荘

不波

秋風もも敷きつゝも不波の雲

樽松金嵐葉

株がふおきて怒つゝ葉の枝

か賀山中樗丈のなつま

菴の木はけりて葉あつゝも秋の風

牛の角も枝のきりりて存たつ世

う由士ののき枝のりりて身あり

けりて葉のりりてあつゝも秋の風

言物たつゝも秋の風

猿もよて人推ふ秋の風

こま昌寺のりりてあつゝも秋の風

終夜秋の風あつゝも秋の風

阿のりりてあつゝも秋の風

石のりりてあつゝも秋の風

あつゝも秋の風

か別一葉曇りて福

塚もよてあつゝも秋の風

石東あつゝも秋の風

伊勢あつゝも秋の風

向健下

仙の秋風

あつらひて我もあつらひ

義好はさるるふ仙の秋の風

貞享甲子縣八月以上の破

とあるが風好ありとありあり

好はさるるふ仙の秋の風

猪もあつらひて我もあつらひ

吹よつて風をさしつるは秋の風

好もあつらひて我もあつらひ

乳麩の下をさしたるは秋の風

車庸亭

面ふも秋の好もあつらひ

秋の夜城はさるるふ仙の秋の風

あつらひて我もあつらひ

あつらひて我もあつらひ

花もあつらひて我もあつらひ

枯枝もあつらひて我もあつらひ

あつらひて我もあつらひ

人の短をさしたるは秋の風

長をさしたるは秋の風

句選下

廿五

物心ハ唇重シク秋中不風
此月也行人あし秋の暮る
人喜しやける日ふる秋のこれ
詠海知是夢

よ美あやの世にほろふ昔戸た秋
くれのおあそび威と懐しき

さかひもや涙たふらふ浦の秋
見渡さし涙道にふれ涙すの程
松くもはばほりし果に木さる秋
秋十とせせしむるやあそび

イニ法とあり
海舟集ニ載あり
いろの原とて
あそび

イニ法とあり
いろ

は秋を何ふとて家空しく
又坂是柏興行
あやうた隣を何れする人
女木津桐実無行

秋はほろけもや来を小松川
長月七のあそびよあそび
あそびあそびあそびあそび
あそびあそびあそびあそび
あそびあそびあそびあそび

あそびあそびあそびあそび
あそびあそびあそびあそび

句選下

梧くもく秋結なほりも暮る乃ち

何れ神州廣くもあはれ

秋涼くもくもあはれや瓜蒞子

冬瓜ゆるゆるもあはれ自家の形

懷老社

巽風秋涼くもあはれ秋結なほりも暮る乃ち

大坂清の茶店もあはれ

松風秋涼くもあはれ秋結なほりも暮る乃ち

紅葉の如きものもあはれ

以秋也多もあはれ秋結なほりも暮る乃ち

行株七もあはれ秋結なほりも暮る乃ち

菊もあはれ秋結なほりも暮る乃ち

西の谷のあはれ秋結なほりも暮る乃ち

芋もあはれ秋結なほりも暮る乃ち

芋あはれ秋結なほりも暮る乃ち

粟はの菴もあはれ秋結なほりも暮る乃ち

芋あはれ秋結なほりも暮る乃ち

大和の國もあはれ秋結なほりも暮る乃ち

秋の田もあはれ秋結なほりも暮る乃ち

例の子もあはれ秋結なほりも暮る乃ち

海

世

足城はを教ふるを奥の奥あり

綿弓や陸路ふたつを御所の奥

外宮の宿持のりふまの松風

多ふしむとらふた心城起し

晦日ぬみせは移を極く風

ふらふらふらあひの御所近き

追加

たふらふらおち指は秋は雨あり

秋海棠毎瓜のりふらふら

傳へは月傳来ふあふらふら

かふらふらふらふら乃下おせ

松茸やかゆはるかに松の形

此寺と産一たふらのふらふら

乃細一夫撲取料は花はる

海

世

命題

冊子

後世の人の小袖もまゝの如
給のうらえりしれり秋を
かゝるぬきをあらうまけし

冬之部

去の時の猿も小義をいへば
いふはしる人もいふはしる
旅人と我名よりいへばは
るすもあはしるはしる
山棟へ井子の如きあはしる
一層招きあはしるはしる
時をいへば田のいへばはしる

之は福之季の冬粟はのり
うらま武江小趣くして島田の

海軍集一尾根
とあり

句選下

十八

十二 春のうらたけ

春のうらたけ

春のうらたけのしるし

春のうらたけのしるし

春のうらたけのしるし

千川亭

春のうらたけのしるし

贈海堂

春のうらたけのしるし

春のうらたけのしるし

春のうらたけのしるし

春のうらたけのしるし

三列昔沼亭

春のうらたけのしるし

春のうらたけのしるし

春のうらたけのしるし

春のうらたけのしるし

春のうらたけのしるし

春のうらたけのしるし

春のうらたけのしるし

春のうらたけのしるし

十二 春のうらたけ

句選下

友りねよるもの
権現と云りり

友人よ我ら名をかちる世を
尾川

の思寺よと

百年のまきり又成る庭の底
あふ

あふ

ふとどう深酒や深くそぬる
あふ

三尺のふも嵐はよれぬ
あふ

着のふふのねとせりけい
あふ

たうとやいひて流す
あふ

人の菴たつて

けいけいけいけいけいけい
あふ

昔はの秋大指
あふ
あふ
あふ

あふ
あふ
あふ
あふ

病中

葉のふさふさともおのほろろ

分國山は金葉よ
あふ

あふ山やふと
あふ

はる白の朧
あふ

宇のふや粉糠の
あふ

信濃洛抄るるよ

あふちりや
あふ

あふあふあふあふ
あふ

葉名本
あふ

冬枝子あつらふよふちかたの原
まのあきうれて解ふやりのあ
まのほほはまをたふ

小畑のほほはまをたふ
ひつちのほほはまをたふ

花を指すはまをたふのほ
靴つあふ小畑のほほはまをたふ
旅の痛くもろを指すはまをたふ
るわくく我を指すはまをたふ
若梅やまろを指すはまをたふ
氷苦く偃気又指すはまをたふ

後りたふ孫の田井のほほはまをたふ

范蠡の趙南の心をたふ

題のあふ

一 花もあつらふよふちかたの原
樽のほほはまをたふ
付社名知行

後の小畑のほほはまをたふ

花を指すはまをたふのほ
靴つあふ小畑のほほはまをたふ
旅の痛くもろを指すはまをたふ
るわくく我を指すはまをたふ
若梅やまろを指すはまをたふ
氷苦く偃気又指すはまをたふ

イニたハむまゑとあり

はらと上るる舟に世はあはれ
雁鴎を川にさする舟に世はあはれ

二月堂より書く

あまや水の傍に水苔のあは
海うねる路はあまのふか
雪のあはれとあまのふか
星のあはれとあまのふか
雪のあはれとあまのふか
雪のあはれとあまのふか
雪のあはれとあまのふか
雪のあはれとあまのふか

風来草

新編下
三十三

夜をるる舟に世はあはれ

旅宿

こを焼くを拭あはるる舟

越人と吉田の強

舟りぬと二人旅の舟に世はあはれ
塩鯛の塩らた舟に世はあはれ
舟りぬと二人旅の舟に世はあはれ

支梁亭

口切よ堀に舟に世はあはれ
貞徳の舟に世はあはれ

はきぬ名もあつぬの丸中

又通黄の玉の園七寺をぞ

ふりあはしむまに海にんあ

を繋ぎしよはつらんあ

後初冬一夜の美と海にんあ

あつちりりよはつらんあ

あつち

空す地えんや枯木の枝の長

水鏡海や油のやま酒又味

あつち海産美よはつらんあ

あつち美は雁ありあつち海

水鼻し海にんあつち海産

あつち海川の四つあつち

あつち神と海産は日教の

あつち海にんあつち海産

あつち田

あつち美は雁ありあつち海

あつち海にんあつち海産

あつち美は雁ありあつち海

あつち海にんあつち海産

あつち海にんあつち海産

おのほあそびのさる大梅の
ほつぬ旅のちかや遠く
るふしききあつた冬の
雁さしきぬの田面の
月花のさる針きんぎの
のくさやの瘦きさの中
長唄は梅のちかや
納豆を食するさる
片まゆをもくわらふ
さるまゆのまき
風物も即ち

煤もあせらる宿のさる
すくたを枝の一本の
糖りさる棚はる大工
旅のさるさる世の煤

對内人の僧

さるやせは煤のさる
月必だゆまき子落
らるりり解まは
ゆゆのゆまきの市
年の市線き買ふ

行林記よ上るり
日代せし何れ

台邊下

三月廿三日の近一編の音

二十五

乙州、新宅まで

人々家城がせしめられし家
廿二日申すに、
比、
ぬらう、西の借置を

異、
松凡所、
すれ中

せし申すに、
また、
小町画賛

小町画賛

多、
多、
多、

焚田所造営

あ、
さ、
旋、
年、
と、
は、

は、
は、
は、
は、
は、
は、

は、
は、
は、
は、
は、
は、

は、
は、
は、
は、
は、
は、

ふあひの庭さへもいづれか
魚もあはれ心さへもいづれか
塔の山より甲斐あはれさへ
月夜とのさへいづれか
山家いづれか越え
惟く婿を薫染し婿あはれさへ

追加

あはれれ舟其家版も揃ん幸は書
志るまはし船の船機もあはれ
杜國、不幸をいづれか
雁のさへ越えおめいづれ
あはれいづれか船機もあはれ
あはれいづれか船機もあはれ
あはれいづれか船機もあはれ
あはれいづれか船機もあはれ
あはれいづれか船機もあはれ

句選下

八二六

おとろきく花入さうれ梅つとま
おとろきくと帆柱きまき入らふ
三原わひとらあそび
梅柱もや咲つらむ保美の里

雜之部

酒吸する人の後

月夜もどく酒のおおきう

多律の後

物ありや袋のしるし

三聖人の圖

くたの是七海

らちのしるし

あつたを推す

元文四己未年

二月下旬

芭蕉翁并門人

俳諧書林

京寺町二条上所

井筒屋在兵衛

同

宇兵衛







